

アメリカという国

アメリカでは4年に一度の大統領選挙^{だいてうりょう}ということで、大いに盛り上がっていますね。

この国を説明しようとする、いろいろ書かないといけないので、いつもの分量にはとてもでないがおさまりません。今回はエスニック（民族）の観点から、アメリカという国について書いてみたいと思います。

ニューヨークの港の入口には「自由の女神」像が立っています。独立100周年を記念してフランス人から贈られた女神像は、右手にたいまつを左手に独立宣言日の入った銘板^{めいばん}を持って、入港した船を迎えます。そして、この像の台座には、エマ・ラザルスという人の書いた詩が彫ってあります。

詩の大意は、「疲れ^{たいい}貧^{つか}しい人々や帰る祖国のない人々を私のもとにおくりなさい。私は黄金の扉^{とびら}の横にたいまつを掲げていますから。」というものです。世界中から移民^{いみん}を受け入っていた当時のアメリカという国の理想を表しています。

ところで、アメリカの民族社会を説明する上で、WASP（ワズプ）という言葉は外すことはできません。White Anglo-Saxon Protestantの略ですが、アメリカ合衆国独立時の中心的な民族グループであった、プロテスタントでイギリス系移民の白人たちを指します。独立後長らく政治経済の中心は、この人たちが担ってきました。この民族グループ以外で大統領になったのは、1961年のJ. F. ケネディが初めてです。同じ白人ですが、ケネディはアイルランド移民の子孫で、カトリック信者でした。（ジョー・バイデン氏もそうですね。）

さて、アメリカ独立後、首都ワシントン D.C. より南のいわゆる南部地域は、黒人奴隷を労働力^{めんかさいばい}とした綿花栽培^{ほんえい}で繁栄しましたが、北部ではヨーロッパからの移民が労働力となりました。フランス、アイルランド、オランダなどからたくさんの移民がやってきて、都市のサービス業に従事したり工場労働者になったりしていきます。これらの移民を旧移民と呼びます。また、移民の一部は新しい農地を求めて、フロンティア^{かいたくぜんせん}（開拓前線）を西へ西へと進め、先住民（ネイティブ・アメリカン）の土地^{うば}を奪^{うば}ったりしながら開発が進んでいきます。

南北戦争後の19世紀末になると、今度はポーランド、イタリア、ロシア、ギリシア、中国、日本などからの移民が増えてきます。この人たちを新移民と呼びます。「ゴッドファーザー」というアメリカの暴力団（マフィア）をとりあげた映画では、移民船に乗ってイタリアのシチリア島からアメリカに来た子ども時代の主人公が、ニューヨーク港で自由の女神像を見上げるシーンがありました。その後、特に第2次世界大戦後は、ベトナムやフィリピンなどアジアからの移民と、隣国^{りんごく}メキシコをはじめとしたラテンアメリカからの移民が増えていきます。この人たちは新移民ということになるのでしょうか。

移民たちはエスニックグループごとにまとまって住んだり、仕事を紹介しあったり、そしてある時は徒党^{とどう}を組んで他のグループと武力衝突^{ぶりよくしょうとつ}したりしながら、社会・経済的な地位を少しでも上げようとしてきました。アメリカのギャング映画の背景には、必ずといっていいほどエスニック間の対立が設定されています。

この一方で、「アメリカン・ドリーム」という言葉がありますが、こうしたエスニックグループ間の格差を乗り越え、成功をつかむ人たちも現れます。特に、芸能やスポーツの分野での活躍が目立ちました。これらの世界では、人気や記録といった人種や民族を超えたところで評価が生まれます。今もアメリカの芸能人やスポーツ選手には、黒人や新移民・新移民の子孫が多いですね。とはいえ、現在もアメリカ社会で貧困に苦しむ人たちは多く、アメリカン・ドリームを実現した人はごく一握りでしょう。

もう一つ、アメリカの地域間の違いについて指摘しておきましょう。1860年代の南北戦争以降、アメリカの大統領はずっと北部の出身者になっていました。南北戦争後の南部は、北部の五大湖沿岸の工業地帯が繁栄し、西部が石油産業で潤うのに対して、奴隷制の廃止に伴い、長らく経済が停滞します。当時の南部の荒廃について、アースキン・コールドウェルという作家の「タバコロード」という小説があります。貧困化した白人を指す「プア・ホワイト」という言葉も生まれました。

時は流れ、1970年代に入って、ジミー・カーターが久しぶりに南部出身の大統領となり、1980年代には西部出身のロナルド・レーガンが大統領となります。そして、バラク・オバマが、2009年にハワイ出身で黒人やイスラム教徒を先祖にもつ初めての大統領になりました。

さて、エスニック（民族）ということテーマに、アメリカの歴史を簡単に見てみました。世界に目を向けると、今も民族の違い、宗教の違いで紛争が起きているところがたくさんあります。国内的にも民族差別の問題はありますし、それは日本とて例外ではありません。民族による対立はやめよう！民族による差別はやめよう！というのは簡単ですが、その解決は簡単ではありません。

ただ、アメリカという国がこれほど圧倒的な国力を持つ国になった理由の一つに、この民族的多様性というものがあったということは言えると思います。その多様性の中には、さまざまな対立や差別や紛争や憎しみが含まれますが、同時にそこから政治・経済・文化の各面での「豊かさ」とでもいうものが生まれている側面もあります。均一な社会では得られないものが、その多様性の中での葛藤（かつとう）を通じた、融和や理解や共存の中に生まれているのではないかと、ということです。

アメリカという国を学ぶことで、私たちの社会を変えていくための意外なヒントを見つけることができるように思います。興味を持った人は、少し古い本ですが、明石紀雄「アメリカのしくみが手短にわかる講座」*書名なのでそのまま表記してあります（ナツメ社）や、明石紀雄、飯野正子「エスニック・アメリカ」（有斐閣選書）などを読んでみてください。